

様式1

令和7年度 山梨県立わかば支援学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針	小中高一貫教育のなかで一人ひとりの思いに寄り添い、たくましい力とゆたかな心をもった児童生徒を育成する
-----------	--

本年度の重点目標	1 特別支援教育の推進
	2 3学部をととした系統性・一貫性のある教育活動の展開
	3 安心・安全な学習環境の確保
	4 個に応じた指導の充実
	5 教員の働き方改革の推進

達成度	A	ほぼ達成できた。(8割以上)
	B	概ね達成できた。(6割以上)
	C	不十分である。(4割以上)
	D	達成できなかった。(4割以下)

評価	4	良くできている。
	3	できている。
	2	あまりできていない。
	1	できていない。

山梨県立わかば支援学校校長 金丸 学

自 己 評 価			
本年度の重点目標			
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標
1	特別支援教育の推進	教職員の専門性の向上	・各種研修会の開催 ・外部専門家との協働
		授業力、授業づくりの向上	・校内研究の実施 ・アンケートの実施
		地域へのインクルーシブ教育システムの推進	・地域の関係機関への研修回数 ・コーディネーターの地域の学校への訪問支援の状況
2	3学部をととした系統性・一貫性のある教育活動の展開	学部目標の柱を統一したことによる系統性・一貫性のある教育課程の編成	・校内研究の実施 ・アンケートの実施
		目標を明確にした体験的学習による教育活動の推進	・実施状況 ・アンケートの実施
3	安心・安全な学習環境の確保	防災・防犯に向けた危機管理体制の確立	・マニュアルの整備 ・効果的な訓練の実施状況
		施設・設備の定期点検による安全の確保	・危険箇所の把握等の対応状況
		児童生徒が安心できる学習環境の確保	・アンケートの実施
4	個に応じた指導の提供	「個別的教育支援計画」・「個別の指導計画」を活用した適切な指導及び必要な支援の提供	・活用及び提供状況 ・アンケートの実施
		キャリア教育計画・進路ガイドブックの充実による客観的な実態把握の促進	・進路に係るアセスメント、キャリアパスポート実施状況
		評価規準の明確化及び指導と評価の一体化	・評価項目の具体化 ・アンケートの実施
		ICT機器の活用と遠隔教育の環境整備	・ICT機器の使用状況 ・ICT活用能力実態チェックリストの活用状況 ・アンケートの実施
5	教員の働き方改革の推進	定時退校日・きずなの日の実践、夏季休暇などの特別休暇や年休の取得により私生活を充実させ、学校教育に反映させる。	・定時退校日、きずなの日実施状況(目標それぞれ年間20回以上) ・年休消化状況(目標年間15日)
		「働く意欲が高まる職場」の創出	・ストレスチェックの集団分析結果 ・個人面接を通して意思確認
6			
7			

年度末評価(1月28日現在)		
自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
・校内研究プロジェクトの内容に合わせ、生成AIや自立活動などに関する研修会を行った ・授業改善を行っていると回答した教職員は94% ・地域関係機関への研修3回(1月8日現在) ・コーディネーターの地域の学校訪問支援21回(1月8日現在) ・専門家相談54回(1月8日現在)	A	・校内研究は次年度2年目を迎える。働き方改革と指導力向上の実現に向けて取り組み ・回答できる生徒のうち数名ではあるが、学習が自分の生活や進路につながるという実感が薄い。学部として授業づくりに取り組み、授業改善につなげたい
・教育課程の一貫性について、教職員の84%が達成と回答 ・研究プロジェクトで協議を進める中で、学校行事が意義のある内容で計画的に実施されていると回答した教職員が96%を占めた	B	・小中高の学部を通した系統的な指導がなされていないとの意見もあった。9マスプロジェクトなど校内研究の成果を生かす ・学習発表会や校外学習が児童生徒の発達や成長を支える活動になっていると保護者の94%が回答 ・児童生徒も学習発表会や修学旅行などに楽しく意欲的に参加できたと実感している ・体験的学習の実施が教職員の過度な負担とならないように、体制など可能な限り整えていく
・マニュアルは整備済 ・危機管理については教職員の100%が達成と回答 ・避難訓練の事前学習に活用できる教材を作成し、自分の命を自分で守るという児童生徒の意識向上につなげようとした ・定期点検により、施設・設備の危険箇所を把握している。ドアやガラスの破損などは事務室と連携し、速やかに修理している	B	・保護者の95%以上が、非常災害時の対応について学校が伝えていると回答。一方で、災害時に生かせる訓練を考えていく必要があるとの意見もある ・防災避難訓練を受けて、自分がどのように行動すべきかを、90%以上の児童生徒が理解している。丁寧な事前事後学習を継続する
・「個別的教育支援計画」については、84%の教職員が適切に作成・活用と回答 ・「個別の指導計画」の適切な作成と観点別評価が行われていると教職員の83%が回答 ・各学部でキャリアパスポートを作成し、実施状況を把握した。進路ガイドブックは継続して改変し、教職員への周知徹底を図った。「キャリア発達アセスメントシート」は当該学年は設定せずに活用 ・評価のプロセスを全学部で統一するために、研究プロジェクトで「単元計画案」を考案。2月に試行。 ・授業や校務でICT活用を適切に行っている教職員は94%以上	B	・次年度からは、「指導要録」「個別的教育支援計画」が校務システム「BLEND」で運用される。また、「個別の指導計画」は試行期間として運用する。教職員や保護者からの意見などもふまえて、よりよい運用を目指す ・「単元計画案」の試行による成果と課題を次年度に生かし、観点別評価を実施する。 ・児童や中学部生徒の27%前後は、ipadやパソコンを授業で使っていないと感じている。効果的な活用方法を考えたり、児童生徒の実感を高めたりすることも必要
・月に2回金曜日に「定時退校日・きずなの日」を設定し、19回実施。今後2回実施予定。 ・年休の取得平均日数は14日(1月6日時点) 特別休暇や振替も利用 ・高ストレスを感じている教職員の割合は5.5% ・多忙化改善に向けた取り組みが行われていると81%の教職員が回答	B	・定時退校により、週休日に出勤せざるを得ない教職員も存在する。研究プロジェクトの成果を生かしたい ・高ストレス者の割合は、昨年度と変化はなかった。仕事の偏りの解消や業務フローの見直しなど、職場環境を整えるという具体的アドバイスを生かす。管理職は面接などを通して教職員の心身の健康状態を把握する。

学校関係者評価	
実施日 (令和8年2月16日)	
評価	意見・要望等
4	・専門性の向上に関しては、県外支援学校の視察を実施しフィードバックする機会があるのが望ましい。また、校内における相互授業参観、事例検討など、研修や校内研究の充実が図られるとよい。相互授業参観は、3学部をととした系統性・一貫性のある教育活動の取り組みにもつながると考える。 ・インクルーシブ教育の推進について、十分に組み組めていると評価できる。
3	・3学部をととした一貫性や系統性について、知的障害支援学校における課題だと感じている。管理職や部主事が中心となり意識化させていくことが重要である。 ・教科学習をすすめる一方で、体験的学習や行事のあり方を教職員で話し合っていくことが大切だと考える。 ・児童生徒が楽しく思い出になるような活動に取り組めるとよいと思う。
3	・来校者が多く防犯の面で対策を考えることが大切ではないか。不審者や動物(クマ)対策として、外向きの防犯カメラの設置を考えてみるのはいかがでしょうか。児童生徒の引き渡し時に、学校側と保護者・事業所双方が認識できる「お迎えカード」のような仕組みを導入することもよいと考える。 ・防災について様々な取り組みをしていると感じる。避難所になっているが、非常時に避難所として活用する訓練を実施してはどうか。地域もかかわって「避難所運営委員会」などを設け、学校と地域で訓練をする地元の小学校もある。
4	・「個に応じた」の捉え方について、「個別に対応する」ことではないという理解が低いのではないだろうか。児童生徒個々のねらいはあるが、集団活動においてそのねらいを達成できるよう取り組んでいる。「個に応じる」という考え方について、教職員間、また教職員と保護者とで共通確認・共通理解することが大切だと考える。 ・児童生徒がipadを活用することで一人一人の思考の方法が広がる。また、いろいろな実態の児童生徒が理解できることも増える。今後もぜひ活用してほしい。
4	・業務を減らすといった目に見える部分の改善と合わせて、楽しさややりがいといった目には見えないモチベーションを向上させることが大事だと考える。両方からのアプローチを継続していくのがよい。 ・ボトムアップ型の研究プロジェクトにより、教職員の意見を実行につなげていったことが学校評価の数値にも表れている。また、管理職のきめ細やかな対応も評価と結びついていると感じる。

留意点 (1)重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。

(2)学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。